# 公式戦開始90年、名古屋軍ユニホーム

1934年の日米野球を機に同年12月に大日本東京野球倶楽部（現在の読売ジャイアンツ）が誕生、翌35年に大阪タイガース（現 阪神）、36年には名古屋軍（現中日ドラゴンズ）など5球団が相次いで誕生し、2月5日に7球団で「日本職業野球連盟」が創立された。

2026年のプロ野球は連盟創立、公式戦開始から90周年の節目の年で、同時に中日ドラゴンズの90周年でもある。本稿では、1937年の名古屋軍ユニホーム（松尾幸造着用）を紹介する。

名古屋軍は新愛知新聞社（現在の中日新聞）が創設したチームで、総監督・河野安通志、監督・池田豊の体制でスタート。養成制度を採用して14歳の西沢道夫が入団、戦前は主に投手として、戦後は中心打者として中日球団をけん引した。

このユニホームは1937～38年に着用されたモデルで、左胸には赤いボールを背景に、金のシャチホコと名古屋のNを組み合わせ、中心にBASEBALLのBをデザインした鮮やかなワッペンが付けられている。左袖には、豊川稲荷の宝珠マークをもとにデザインされた、新愛知新聞の社章が付けられている。また、背番号は赤の太字が用いられている。

白黒写真しか一般にはない時代で、戦争へと向かいつつある時代背景から、どうしてもモノトーンのようなイメージを持ちがちであるが、プロ野球草創期にも鮮やかな色を用いたユニホームがあったことは驚きである。

1949年までプロ野球は1リーグで行われており、1937、38年のみ春秋の2シーズン制で開催。このユニホームを着た名古屋軍は37年春は7位、同年秋最下位、38年春が7位と低迷したが、38年秋は19勝18敗と勝ち越し、4位と持ち直した（37年春～38年春は8球団、38年秋は9球団）。

公益財団法人 野球殿堂博物館
学芸員 関口貴広